
Lostpowers2

東 孝太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lostpower2

【Nコード】

N8572X

【作者名】

東 孝太

【あらすじ】

「情」を多く持つ悪魔の主人公。ウェルギウスⅡルシファーは一人の少女と出会い、少女と旅をした。そして、世界を守り命を落とした。

主人公の居なくなつた平和な世界。その世界では悪魔たちによる「終末」が始まりつつあつた。

第1 stage 始まり

アルスの死から一年の時間が過ぎた。

世界は零とSが誕生する前のいたって平和な世界に戻りつつあった。そもそも平和とはどのようなものなのかははっきりしていないが、零とSが存在していた時のように毎日が恐怖に包まれていることはなくなった。言うならば以前よりは平和になったと言うべきであろう。

そんな平和な世界で高校に通い、2年生となった姫坂雪音はとある学校の2-Aという教室の中で窓側の前から3番目にある自分の椅子に腰をかけ、机に肘をつきながら意味もなく窓の外を眺めていた。桜の花びらが空を舞っている。

「ゆーきねっ！」 姫坂は突然後ろから何者かに声をかけられた。

「その声は水玉か。なんだ？」 姫坂はそう言いながら視線を窓から自分の後ろに立つ人物に変えた。

女子高校生で2年にして身長170cmという高い身長を持つ黒髪ショートヘアの野球部のマネージャーの少女。数多い姫坂の友人の中では3番目に入るほどの仲だった。名前は水玉萌^{みずたまもえ}である。

「なにぼんやりしてんの？もしかして好きな人が出来たとかあゝ」
水玉はからかうように言った。姫坂は表情一つ変えず、冷やかに否定した。水玉は肩を落とす。

「じゃあなんでそんな上の空なの？」 霧島はため息をついて行った。雪音は別に、とつまらなそうに言い、自分の机から教材を出した。

「それよりもあき。宿題やったのかね？ 前回も前々回も宿題を忘れただろう。今回忘れたら呼び出しをくらうかもしれないぞ」 姫坂はこれ以上発展しないと思い、話題を変えた。姫坂にいきなり話題を変えられた水玉はいやな顔一つせずむしろ自慢げな顔になり、腰に手を当てて笑った。

「ふっふっふ」。ちゃ〜んとやってきたのだよ！ ほらね！」 霧雨

はそういつと雪音の右斜め前の自分の席から一冊のノートを取り出し、雪音の前でパラパラとめくって見せた。

「それは国語古文のノートだろ。今回の宿題は数学？だぞ」姫坂が冷たい声で言った。霧雨の手からノートがパサリと落ちる。

「馬鹿だなあ君は。ノートを貸してやる。写すか何かしてやり過ぎすんだな」雪音が霧雨の手にノートを押しつけると、姫坂は力なく受け取り、ふらふらと自分の席に向かった。

ふう、と姫坂はため息をついた。そしてまた視線を窓の外に変えた。桜の花弁と共に蝶が優雅に飛んでいる。

(やはり足りない) 姫坂は心の中で呟いた。

(アルスは今頃天国・・・いや悪魔だから地獄か)

(地獄で何やってているのだろうなあ・・・) 姫坂の黒い髪に窓の外から吹いてくる風が当たり、なびく。床に落ちている姫坂のノートも風に吹かれ、ペラペラと音を立てながらめくれる。

世界には春が訪れようとしていた。

第2 stage 春風とともに

授業を終えた雪音は霧雨にノートを見せてくれた礼にと映画のチケットを手渡された。最新作の映画だったことと、特に断る理由もなかった。なので姫坂は受け取った。

水玉は姫坂に集合時間を告げると時計を見て時間だ、と呟いて、姫坂に別れを告げて駆け足で去って行った。雪音も他の友達に別れを告げ生徒会室へと向かった。

姫坂は零とSの脅威から世界を救った英雄という事になっているので、その正義感を買われて生徒会に入ったのだ。役柄は副会長である。生徒会長は面倒なので断った。

姫坂は生徒会室に到着し、扉を開くとその扉の向こうで広がっていた異様な風景に目を疑った。

誰もいないのだ。

会長どころか書記も会計もだれ一人いない。鞆自体は置いてあるが誰もいないのだ。もし生徒会室以外での活動ならば、机の上に連絡を伝える紙が置いてるが、それもない。

「どこ行っただ？」 姫坂は呟く。外を通ったバスの走行音が部屋に響く。

姫坂は鞆を自らの机に置くと椅子に座った。孤独という名の沈黙が続く。

(眠い・・・)

姫坂は暇による睡魔で机に顔を伏せた。そして眠りに就いた。

*

姫坂が目覚めると辺りは真っ暗だった。時計を見ると夜の8時。しかし生徒会室の机には相変わらず会長を含め他のメンバーの鞆が不気味に佇んでいる。周りは驚くほど静かだ。

「何かおかしい・・・」姫坂は呟いた。姫坂の肘が当たり、鞆が倒れた。姫坂は埃だらけの床に転がった鞆をつかみながら呟いた。「探すか・・・。何かおかしいことが起きているみたいだ」姫坂は鞆をゆつくりと持ち上げ、机に置くと、部屋を後にした。

右と左の廊下は両方とも不気味な闇と窓から注ぎ込む月光によって縞模様のようになっていた。左廊下の一番奥は深い闇のようになっていて飲み込まれそうな雰囲気を感じさせる。姫坂はその闇に生徒会室にあつた懐中電灯を照らした。何もなただの壁がたたずんでいる。

「怖い・・・いや怖いと思うから怖く思うんだ。お化けなんかいない」
姫坂は一人で呟き、そして歌い始めた。

「怖くないっつ　こっこっこっ　怖くないっつ　怖くなんかなっ　いも
んもんもん」　唄声だけが廊下に響く。

姫坂が歌い終わつた瞬間、ドンツ！という音が響いた。姫坂が鳴らした音ではない。その音の発信源は右廊下のずつと奥だった。雪音は唾をのみ懐中電灯を持ったまま右の廊下へと進んだ。音は次第に大きくなっていく。

姫坂は4つほど教室を越し、音が一番大きく聞こえる奥の部屋。美術室へとついた。音は相変わらず響いている。

姫坂は深呼吸をすると、扉を開けた。
美術室には何も無い。いつの間にか音はやみ、彫刻が月光で不気味に影を帯びて佇んでいる。

「何にもない・・・そんなはず・・・」姫坂は呟き、後ろを振り返り戻ろうとしたその時、自らの背後に気配を感じ振り返った。

・ゴンツ

美術室に鈍い音が響き、姫坂の身体は床に倒れた。

*

「きね・・・ゆきね・・・雪音っ!」

姫坂は何者かに揺さぶられ、かけられた声によってゆっくりと目を開いた。目の前には縄に縛られた会計の郷浦咲子（ごうらさきこ）となんとか縄を外そうとしている品川誠（しながわまこと）が、その後ろに書記の山本康介（やまもとこうすけ）と泣きそうな顔の久保美咲（くぼみさき）がいる。姫坂は生徒会全員の所在を確認すると、ゆっくりと立ち上がった。殴られたからか頭が痛い。

「なんか生徒会の活動中に皆寝ちゃって・・・気付いたらこの部屋にいたの・・・雪音はそうじゃないみたいね・・・。そのこぶ、殴られたの？」郷浦は頭を押さえる姫坂を心配しながら自分たちがここに連れてこられた経緯を話した。姫坂はどうやらそのようだ、と呟いて自分の手元を見た。

- 縛られている -

姫坂は周りを見渡した、見たことのない部屋だ。学校にこのような教室は無い、と姫坂は呟く。郷浦も確かに、と返事をする品川が縛られた手で地面を叩き、「誰がこんなことを！」と憤った。

「あわてるな。この状況を打破する方法を考えるんだ」
そういったのは生徒会長の山内秀（やまうちしゅう）だ。だが山内はどこか落ち着きがなく、そわそわしている。本人も恐怖を感じているのだろう。

「この状況を脱出する何かを考えなくてはならないな。みんな、とりあえず空いてるドアが無いか調べてくれ」姫坂が冷静に言った。他のメンバーもその考えに賛成し、よろめきながら立ち上がった。

カラカラカラ

生徒会のメンバー達がいままさに脱出方法を探そうとした時に部屋の左奥の扉が音を立てながらゆっくりと開いた。6人に緊張が走る。「やっと気がついたか生徒会イ」男の声と共に誰かが扉をくぐって部屋へと入ってきた。

「山部先生・・・どうしてこんなこと」郷浦が不気味な笑みを浮かべる教師に震える声で言った。

「あることの為に集めたんだよ。ある作戦の為に」山部はゆっくりと生徒会まで近づく。その姿を見て、姫坂は生徒会のメンバーの一番前に飛び出した。

「なんだ教師よ。作戦？私たちに何かするつもりか？レイプなんかしてみる、肉片ひとつ遣さず殺すぞ」姫坂が獲物を狙う肉食獣のような目で山部を威嚇した。しかし山部はまったくひるまずに、不気味な笑みを浮かべたまま雪音の前で立ち止まった。

「違う。俺が用あるのはお前だ・・・、姫坂ア」山部は雪音の胸倉をつかみ上げた。郷浦が「雪音！」と叫ぶ。山部はポケットから真っ赤な石を取り出し、雪音に見せると質問をした。

「これ？何だと思う？普通の石じゃないんだがな」

「知らない！ なんかの宝石か？」姫坂が必死に脱出を試みるが、縛られた手では、山部の手から脱出することが出来ない。

「魔石だよ」山部がその石の正体を告げると、姫坂は驚愕し、抵抗する手を止めた。

「嘘でしょ・・・魔石って・・・」

「残念ながら嘘じゃねえんだ、これはお前がつぶしたSの社員だった外崎さんから配布された魔石。なんで外崎さんが魔石を持つてるかは言わねえけどな」山部は姫坂をつかむ手を緩めた。姫坂は床に転がった。郷浦達が駆け寄り、姫坂をかばうように前に出る。

「雪音エ・・・俺の作戦っーのは、外崎さんから頼まれたんだ。お前を殺せつてな」

「なら！」床に倒れている雪音が山部を睨みながら言う。「生徒会メンバーは関係ない！逃がせ！」

「ああ・・・生徒会メンバーが何故集まってるかって？」山部が魔石を光らせて言う。

「こいつら全員殺して、お前に最高の絶望を合せてもらいながら死んでもらうためだよ」魔石が光ると、教室の影が盛り上がり、黒いオオカミのように変わる。久保が「ひっ！」と声を漏らしておびえる。

「殺れ」山部が小さく呟いた。黒いオオカミはその声を聞き、郷浦に飛びかかった。姫坂がなんとかオオカミを追い払おうとするが、オオカミは郷浦にのしかかり、抵抗する郷浦の首にかみついた。

郷浦はしばらく抵抗していたが、動かなくなる。姫坂が憤慨し、オカミに飛びかかるが、オカミはいとも簡単にかわし、山内に飛びかかると、一瞬でのどにかみつぎ、黙らせた。

泣いている久保にもオカミは飛びかかり、その牙で息の根を止める。品川と山本は2人で力を合わせオカミを攻撃し、影に戻すが、魔石の力で山部が作り上げた闇の刃により、貫かれて周りを血の海にしながらかなくなつた。

「うわあああああつ！」姫坂が涙を流しながら憤慨し、地面をたたいた。山部が高笑いし、雪音を見下した。

「さあ、最高の絶望を合わせたところで死んでもらうか」山部が闇で作り上げた刃を雪音に向けた。雪音は刃を蹴り飛ばし抵抗するが、刃は消しても消してもその姿を作り上げ、姫坂の頭に向けられた。

「じゃあな、世界を救つた英雄さんよ」山部が刃を振り下ろした。刃が今まさに姫坂を切り裂こうとした瞬間に、教室の窓から何者かが飛び込むように入ってきた。教室に入ってきた何者かは山部を蹴り飛ばし、地面に足をついた。

山部が壁に叩きつけられると、周りにあつた生徒会メンバーの死体は消え、何もない教室だけが広がった。

「大丈夫でしたか？」入ってきた何者かが姫坂の手の縄をちぎり、声をかけた。姫坂はその声に聞きおぼえがあつた。

「あ……アルス!？」

第3 Stage Lost memory

「ア・・・アルス？」 姫坂は突然現れた存在しないはずの青年に驚きが隠せなかった。目を丸くして目の前の青年を見つめ、混乱すらしていた。彼女の頭の中は真っ白だった。

青年の顔は窓から注ぎ込む月光に照らされ、次第に明らかになっていった。

「やっぱりアルスだ！」 青年の顔が完全に見えたとき、姫坂は笑顔でいった。

「でも君は死んでいたはず・・・。どうやって生き返ったんだ？」

姫坂の言葉に対し、青年は無言である。青年の視線の先にあるのは姫坂ではなく山部であり、姫坂という友との再開を喜んでいるようではなかった。

「おい！？なんで無視する？ アルスっ！」

姫坂は青年の胸倉を背伸びびして掴んだ。

青年はいきなり胸倉を掴まれたのでひどく驚き、目を白黒させながら姫坂を見た。

「すみません・・・あなたは誰ですか？アルスって言うのは私の名前なのですか？」

青年の言葉に姫坂は思わず手を離れた。

「アルス・・・何言ってるんだ・・・。冗談でも怒るぞ！」 姫坂は声を震わせて言った。しかし青年の目には嘘をついているような戸惑いはなく、真っすぐな目だった。

「何ごちゃごちゃとやってるんだ？」 姫坂がもう一度アルスに掴みかかるうと、したときに先程攻撃を受け、飛ばされた山部が瓦礫を退けて立ち上がった。

「危ないから下がってて」 青年は自分の前にいる姫坂を手で押しつけた。

「ねえ！ アルス！」 姫坂は目に涙を浮かべて叫んだ。アルスが姫

坂の言葉に振り返る。

「すいません」アルスはそれだけ言った。そして手で空中を叩くような動作をした。

「影剣^{シャドウ}」青年はそう呟きながら闇をまるで物体のように引き延ばし、真つ黒な剣を作り出した。

「命まではとりません。安心してください」青年は冷たい表情でいった。

「ほざけ！クソガキが！」山部は青年まで素早く移動し、ナイフを振るった。しかし、青年はいとも簡単にかわし、影で出来た剣で山部を突き刺した。

山部は悲鳴をあげて、ナイフを落とした。

「終わりです。弱い人だ」青年は影の剣を落とした。地面に触れた剣は床の間に溶け、消えた。

「クソガキがああ・・・」山部は魔石を光らせた。

「無駄だつていつてる。俺はお前を殺したくない。早く降参して帰れ」青年はため息をついた。

「絶対殺す！ころす！コロス！」

「あらら。負の意識が強すぎて魔石に飲まれたか」

青年は歯が尖り、悪魔のような山部の前で拳を振りかざし、素早く振り下ろした。

だが、彼の拳は山部の手に吸い込まれるようにおさまり、今度は山部が拳を構えた。

「や」青年は言葉を全て発する前に顔に拳を受け、窓を突き破り、外に飛んでいった。そして木にぶつかり、地面に落ちた。

「アルス！！」姫坂は窓の外を見た。

「よそ見するな」窓に手をかけている姫坂の後ろで山部が黒く輝く爪を振りかざした。

ガシユツという肉が裂ける音と共に窓辺は血に染まった。

山部の狂気に満ちた叫び声が夜の町に響いた。

窓辺は血に染まり、姫坂は血に染まった。

しかし倒れたのは山部の方であった。山部の頭を窓の外から伸びた影の刃が貫通している。

攻撃をしたのはもちろん青年だった。青年は木の枝に止まり、手から影の刃を伸ばしていた。

「が……がああああっ！！山部の悲鳴ともいえる悍ましい雄叫びが響いた。学校の周りの家の窓が次々と開き、野次馬が学校を覗く。」

「マズい！ 誰かに見られたら通報レベルだ！」

姫坂は慌て、青年に早く教室に隠れるように指示した。

しかし青年は戻らず、姫坂に手を振った。

姫坂は青年の手を見ると共なって、意識が遠退くのがわかった。ダメージを受けたわけでもなかったが、不思議と眠りの世界に誘われていく。

「あ……アルス……行く……な……」姫坂は遠退く意識の中で必死に呼び掛けた。

だが姫坂は睡魔に負け、目を閉じた。

*

「ね……ゆきねーっ！」姫坂が声に反応し、ゆっくりと目を開けると、目の前にはどこかで見たことのあるクマの人形。

「あ、気がついた。あんたなんで一日生徒会室で過ごしてんの？」

無断欠席になっちゃったよ」

姫坂を起こしたのは生徒会の会計、郷浦だった？周りは何も変化のない生徒会室。

「さきちゃんか……。そうか……夢か……」姫坂は頭を起こした。少し頭痛がする。

「アルス？ 誰？ 夢の中で誰か会ったの？」

「昔の友人だ。死んだがな」姫坂は自分の服を見た。服は血ではなく、昼食の時にこぼしたスパゲティのソースがついている。

「音楽室・・・音楽室で何か異変は？」姫坂は少しの希望をかけて、郷浦に聞いた。

「何にも無いよ」郷浦はにこやかに笑った。

「・・・やっぱり夢か」分かっている結果であったが姫坂はショックだった。

「帰る。ちよつと用事がある」姫坂は鞆を持ち、歩きだした。ギシギシと床が軋み、少し沈む。

「あーい。会長にいつとくね」郷浦は手を振った。

姫坂は郷浦の行動に、またわけのわからない睡魔に襲われるんじゃないかと不安になった。

姫坂の用事

それは普段はその男の命日にしか訪れない場所。

アルスの墓であった。姫坂はアルスの墓参りに出かけたのであった。

*

アルスの墓の前で姫坂は足を止めた。右手には花を持ち、左手にはキーホルダーを持っている。

「アルス・・・。夢だったけど、少しでも話ができてよかったよ。

例えば君が私の事を忘れても私は君を忘れないからな」姫坂は古くなつた花を変えた。古いと言っても少し緑が残っている。姫坂は少し前にノアが来たんだな、と推測した。

「これもやるよ。昔、君と初めて会った時君のポケットに入ってたキーホルダーだ。多分大切なんだろう？」

姫坂がキーホルダーを墓の前に置こうとしたときに、姫坂の後ろで砂利を踏む音が聞こえた。

「どうしたの？ 雪音さん」

突然名前を呼ばれ振り返ると、姫坂の後ろにいたのは、かつて戦った仲間。

ノアだった。

「奇遇ですね。僕も花を添えに来たんですよ」ノアの手には新しい花が握られている。

「でも雪音さんが添えてるならいいかな……。僕はその古くなつた花を持って帰りますよ。枯れてますけど綺麗な花だったんでしょうね」

「ああ」姫坂は答えた。

「綺麗な花だったよ。こいつの墓には似合わないほどに」

姫坂がノアに背を向け、花を手向けてた時、ノアは拳銃を姫坂に向けていた。

「甘いな！」姫坂は呟くと同時に花を投げた。花弁が散り、ノアは後ろへ後退した。

「ノアじゃないことは分かっている。この枯れた花、ノアが添えたものだ。君の発言とは食い違いがある」姫坂はポケットから粉と液体が入ったカプセルを取り出し、ひねった。

カプセルは細長いサーベルに変わった。昼間の墓場に沈黙が走る。

「こりゃあ思ってもみなかったところでミスしちゃいました。そうです、私はノアではありません」ノアは黒い煙と共に赤い髪に白いスーツの男に変わった。

「私は魔族って言えばわかるかな？ 君のよく知ってるその墓の中で眠ってるウエルギウス。もといアルスと同じ種族。その中の大魔王側近部第3番隊の隊長のマルバーです。以後お見知りおきを」マルバーは頭を下げた。

「礼儀正しい悪魔だ。だがそのキザな態度が気に入らないな」姫坂はレイピアをマルバーに向けた。

「礼儀正しいのが私のポリシーですから」マルバーは微笑を浮かべた。しかし姫坂はその微笑に、とてつもない邪気を感じた。

「何の用だ」姫坂は警戒心を強め、いつ相手が攻撃してきても反撃

できるように構えた。マルバーはそんなに怖がらなくても大丈夫ですよ、とまたもや微笑を浮かべる。

「最近悪魔が人間を助けてるって言う噂を聞きましたね。もしかしたらデアリアルスが生きてるんじゃないかって思いまして来てみましたが、先ほどの対応を見て分かりました。その可能性は無いみたいですね」

「私も今確認した所だ。残念だったな」姫坂は周りに人が居ないか確認し、安心した。

もし戦闘なんかになり、周りの人間を傷つけてしまえば、色々と面倒だからだ。

「まあ、今日の所は確認だけです。それでは」マルバーは拳銃を下ろし、姫坂に背を向けた。姫坂はマルバーが自分に背を向け、立ち去るまでじっとマルバーを睨んでいた。

完全にマルバーの姿が見えなくなると、姫坂はレイピアを元の粉と液体に戻し、地面に捨てた。

そしてもう一度墓に視線を戻した。

が

「悪魔の言う言葉に惑わされちゃだめですよ」

「えっ!？」姫坂はマルバーの声に、急いで振り返った。

振り返った姫坂の前にあったのは銃口だった。

ドン

銃声が響き、アルスの墓石に血が飛び散る。姫坂は銃弾を浴び、吐血し、墓にもたれながらゆっくりと倒れた。

姫坂が倒れると同時にマルバーは銃を指で回転させて、そのまま血にまみれたスーツのポケットにしまい込んだ。

「さすがに手ぶらじゃ帰れないでしょう」

マルバーは口元を緩めて、墓にもたれて首を垂らしている姫坂を見つめていた。

墓場に風が吹き、木々がざわざわとざわめいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572x/>

Lostpowers2

2011年10月26日13時02分発行